

県民個人所得

県民総生産と県民総支出、すなわち県民所得と支出のバランスは、県民経済全体についての損益計算書とすることができます。このバランスは、県民経済における経済活動が企業だけで行なわれるならば、県にあるすべての企業の損益計算書を集計し、整理してできあがりません。

しかし、現実の経済活動は、企業だけで行なわれるものでなく、前にも触れましたように、世帯とも密接な関連のもとにいとなまれております。

世帯は、企業や県などの生産活動に参加して、賃金、俸給、利子、地代などの所得をえたり、生産活動にともなわない振替所得を県などから受取り、これらの所得を消費用の財貨やサービスに支出し、あるいは、その残りを貯蓄して暮らしをいとなんでいます。

このような世帯の収支の状態をしめした収支計算書、つまり県にあるすべての世帯について集計したものが、個人所得とその処分の勘定（個人バランス）とよばれるものであります。この個人バランスは、県民経済における世帯の消費生活のすがたをあらわしています。

ところで、個人所得が実際にどのように使われたかをしめすものが、個人所得の処分または個人支出であつてこのことは、前号でお話したわけですが、個人所得の額と個人支出の額は見合つております。

個人所得は、勤労者や個人業主をはじめ、土地、預金、社債、株式などの個人の財産所有者などが、一定期間に実際に受取つた所得をしめすものであります。そして、これには、恩給、年金、生活保護関係の救済金など、個人の経済活動にもとづかないで、県や国から支払われたいわゆる振替所得というものも含まれます。

そこで、個人所得と分配県民所得とどこがちがうかといえますと、分配県民所得は、一定期間における経済活動または生産活動にもとづいて発生した所得であり、生産者要素に支払われるべき所得であります。したがつて、分配県民所得には、個人が受取るべき所得だけでなく、法人や官公事業の所得も含まれます。これに対し、個人所得は、個人が実際に受取つた所得でありますから、法人や官公事業の所得も含まないし、また分配県民所得に含まれない振替所得も含まれます。

分配県民所得とは別個に、このような個人所得というものが考えられ、推計されるわけは、個人所得が、個人の消費購買力または消費需要を最もよく反映するものであります。そして、この個人の消費需要の大きさおよびその動きは、企業の投資需要とともに、経済活動の動きに影響を与える最も大きな要因と考えられているからであります。

(第4表)

県民個人所得

区 分	昭 和 33 年		昭 和 34 年		前年対比
	所得実額	構成比	所得実額	構成比	
1 総 額	148,963,292	100.0	167,454,846	100.0	112.4
2 勤 勞 所 得	58,385,745	(39.2)	69,722,963	(41.6)	116.9
(1) 賃 金 お よ び 俸 給	56,493,948	37.9	66,896,832	39.9	118.4
(2) そ の 他	4,543,628	3.0	5,696,163	3.4	125.3
(3) 控 除 (社会保険料)	△ 2,651,831	△ 1.7	△ 2,870,032	1.7	108.2
3 個 人 業 主 所 得	73,656,365	(49.4)	79,201,072	47.3	107.5
(1) 農 林 水 産 業	47,540,793	31.9	51,395,167	30.7	108.1
(2) 農林水産業以外の産業	25,495,882	17.1	27,034,561	16.1	106.0
(3) そ の 他	1,205,904	0.8	1,498,750	0.9	121.4
(4) 控 陸 (国民健康保険税)	△ 586,214	△ 0.4	△ 727,406	△ 0.4	124.1
4 個 人 賃 貸 料 所 得	6,135,252	(4.2)	6,438,162	(3.8)	104.9
5 個 人 利 子 所 得	3,591,136	(2.4)	3,907,617	(2.4)	108.8
6 個 人 配 当 所 得	437,815	(0.3)	490,070	(0.3)	111.2
7 振 替 所 得	6,756,979	(4.5)	7,694,962	(4.6)	113.9

第4表にしめされているように、個人所得のしくみは分配県民所得から、法人所得のうち、法人税と法人留保と、公益事業剰余、さらに失業保険や、健康保険などの社会保険の負担金を除き、新たに振替所得を含めただけで、分配県民所得のしくみと非常に似ております。すなわち、個人業主所得、個人賃貸料所得、個人利子所得、個人配当所得などは、分配県民所得のこれらの項目と同じものが計上されていますが、ただ勤労所得だけは、分配県民所得とちがった内容のものになっております。

第4表に掲げてある勤労所得（発生額）は、分配県民所得の勤労所得と同じものであります、これから、社会保険の備前負担および被備者負担を差引いた勤労所得（受取額）が、個人所得として扱われるところの勤労所得であります。これらの負担を差引くわけは、これらも生産活動にともなつて発生し、勤労者に分配さるべきものではありませんが、個人所得として実際に受取られたものではないからであります。なお個人所得の各項目は、分配県民所得と同じように、所得税などの直接税的負担を差引かないままに計上されています。

なお、個人所得から個人税および税外負担を差引いたものを個人可処分所得とよんでいます。（第3表参照）

これは、そのまま個人消費と貯蓄にむけられるところの所得であります、個人の消費購買力をあらわすもの

としては、個人所得よりも、むしろこの個人可処分所得の方がより適当でありましょう。

以上で、大体生産、分配、支出の県民所得の各系列についてお話ししたわけですが、これらの体系を用いて実際の県民経済を分析するわけでありまして。

それでは、そういつた変動する経済のすがたに注目してみましよう。そして、そのまえにわが国の経済のすがたについて眺めてみましよう。

国民経済において、年々つくりだされる生産物が、すべて消費しつくされてしまいますならば、その経済は年々同じ規模で生産がくりかえされることになりませんが、もしそれが、全部消費されないで一部が貯蓄にまわされ企業によつて投資にあてられるならば、その経済は、拡大された規模で生産が続けられるわけです。また生産以上に消費するならば、その経済は縮小していくことになるでしょう。

しかし、現実の経済は、現状のままとどまつていることも、拡大しつづけるということではなく、絶えず上向いたり、下向いたりして変動しながら成長するというのが実状であります。この変動する経済のすがたを、普通景気変動といつております。

これから、こういつたことがらについてお話ししてみましよう。（横須賀）



「氷壁」から

冬山のシーズンになりました。豪壮な山嶽のスケールや、或いは大自然の圧倒するような美しさは、山に登る者のみに開放される自然界のサービスでありましよう。山の好きな者にとつては、山のよさを幾千の美辞をもつて飾つても、尽きることはないと思います。それは、平地にうごめく人々の窺い知ることの出来ない世界であり日常生活の感覚では想像できない仙境でもあります。

しかし、山と人とを画いた小説や随筆が、昨今では如何に多くなつたことでありましようか。登山ブームなどといわれ、登山人口は増加する一方であり、この増加傾向はまた、山岳小説への刺戟剤となつて、国民所得上昇の余波（ごく最近では物価騰貴によつて若干水をさされたかも知れませんが）を受けて、益々その増加傾向（量的にも質的にも）を強めております。

さきに井上靖著の「氷壁」という山岳小説がありまし

たが冬山シーズンでもあり、作中2、3の事柄にふれ、統計的な面から駄文を綴つてみることにしました。作中にてでくる主人公魚津は僚友小坂を前穂高に失いました。切れないといわれたナイロンザイルが切れてしまいました。そこで小坂の死が、ザイルの切断によるものであつたが、ザイルは切れたのではなく、切断されたという疑惑が生じ、その疑惑が魚津に向けられ、かつその疑惑を決定的なものにしたのが東邦化工専務八代教之助工博のザイル切断実験でありました。

この実験に若しも統計的方法がとり入れられて、即ち品質管理とでもいいましようか、或は推測統計的方法が実験に応用されて、その結果8ミリのナイロンザイルが切断するということは、99%の信頼度のもとははいえない、つまり切断するということは1%の信頼度しかないというような結果がでたとすれば、私共統計人は、通常

のロッククライミングの墜落では、ザイル切断は起こらないと考えるでありましょう。

しかしながら、小説上では、切断の際の描写、科学的切断実験方法について次のように述べています。

先づ、切断時の模様について、「魚津はビツケルを岩の間に立てたまま、友の姿に目をやっていた、風は斜面の左手から吹きつけて、絶えず雪煙りが下方の空間を埋めている。時々落雪が不気味な音を立てて魚津の足場に散つた。その時小坂は魚津より5メートル程斜め横の壁にとりついて、ザイルを頭上につき出している岩に掛ける作業に従事していた。ふしぎにその小坂乙彦の姿は、魚津には、一枚の絵のようにくつきり澄んでみえた。(略)事件はこのときに起つたのだ。魚津は、突然小坂の体が急にずると岩の斜面を下降するのを見た。次の瞬間、魚津の耳は、小坂の口から出た短い烈しい叫び声を聞いた(略)小坂の体は何ものかの大きな力に作用されたように岩壁の垂直の面から離れた、そして落下する一個の物体となつて(略)小坂が、彼の視野のどこにもないのに気付いたとき、魚津は事件の本当の意味を知つた。」

またザイル切断の実験について、実験担当の八代博士と、魚津との会話で、「現場をそっくりそのまま再現して実験するのが一番理想的なのですが、現在のところではこれは望めません。現場を再現するという事は、つまり事件の起つた岩角の型を石膏でとり、それと同じ岩角をつくつて、それにザイルを掛けて試験をする。しかしこれは雪の解ける6月から7月まで待たないとできない相談です。(略)幾つかの岩角をつくり、それを使う以外仕方ないと思ひますね、問題の岩角は、何度位なんでしょう。」「いかに岩が尖つていたとしても90度ぐらいではないでしょうか」「(略)刃物のように尖つた岩だつたら避けるのが当然でしょうから、じや実験では90度の岩角ともう一つ、それより2倍の鋭さをもつ45度の岩角を作つてやつてみましょう。」更に実験方法としてテストに使われるザイルは、マニラ麻12ミリ、同24ミリ、ナイロン8ミリ、同11ミリの登山用ザイル、高さ10メートルの櫓から55キロの落下物を結んで、70度、80度、垂直落下の場合について、高さ1メートルから50センチづつ増して実験されました。

このようにザイル切断実験が、いろいろの場合を想定して長時間にわたつて実験された訳であります、その結果は、やはり切れなかつたのであります。

しかし、この実験は、同一の状態に対しては、一体何度位づつ落下試験をしたのでありましょうか、例えば、垂直落下で、高度10メートル、リツヂ90度、落下物重量55キロの場合、8ミリのナイロンザイルでは切断しないという結論が、例えば、100回の落下試験をしても切れなかつた、その状態における8ミリナイロンザイルの抗張

力の限度は、何千回で切断する。または何十本かの同じ太さのザイルについて、その各々が切断するまでのテストを反復し、数多くの試行の中から、同ザイルのもつ抗張力の平均限界とか、分散を求めて、統計的に一々同ザイルのもつ性能を導き出したのでありましょうか。

この小説から感じとして受ける実験では、各種の場合を想定した実験が行なわれたでしょうが、同一状態については、一度づつしか行つていないような印象を受けます。

ここで、魚津と小坂との前穂高東壁への行動を追つてみますと、昭和29年12月28日新宿発22時45分、29日午前4時57分松本着、同日午後3時45分大正池畔、大正池売店を同4時05分発、ホテルの番小屋着は同日午後5時、翌30日午前8時ホテルの番小屋発、11時徳沢小屋着、この日荷上げ作業、31日朝徳沢小屋より行動開始、大晦日は、雪に埋もれた奥又白の中腹の、タカラの木と呼ばれている一本の大きなダケカンバの根もとで過ごし、ここ以外は、どこも雪崩にやられる危険があり、こんどの山行は、前穂高の東壁を征服することでありました。東壁とは、Aフェース、Bフェース、Cフェースと、その側面の北壁とを総称して東壁といつており、今回選んだコースは、北壁より、Aフェースを経て、前穂高の頂上へ登ることであつたといつております。

更に昭和31年の元旦は、奥又白の中腹の、雪に埋もれたテントの中で迎え、食事は4時半から30分で終り、5時半行動を開始、奥又の本谷からB沢へ出、膝までもぐる雪の中を進んでゆき、7時B沢を上りきつたところで初日が上つたわけでありました。7時半北壁のつつきに到着、8時北壁の絶壁にかかり、午後3時北壁を登り切つて第2テラスに出、この所要時間は8時間、3時半Aフェースにとりつき、5時半吹雪と暗くなつたため登攀不能となり、ビバークしたことになります。元旦の夜を絶壁の岩の隙間で過ごし、2日7時半ツエルトをたたみ、7時50分再び行動を開始、トップは小坂、セカンドとしてジツヘルに廻つたのが魚津であります。1時間半程かかつて20メートル登攀、あと10メートル程でAフェースの登攀が終了する地点まで到達しました。

この直後に事件が起きた訳であります。以上をみて参りますと、昭和30年1月2日午前10時ごろ、前穂高東壁Aフェースの、殆ど登攀が終了する地点で切断事故が起つたこととなりますが、実際の遭難記録にも、このモデルと思われるものが見受けられます。

その一つは岩稜会が、昭和30年1月2日前穂高の東壁Aフェースにおいて、東京製綱製のナイロン8ミリザイルを使用し、ザイル切断による即死事故がありました。

またその翌日、大阪市大山岳部が、同様に前穂高三峯にて、東京製綱製のナイロン11ミリを使用しザイル切断事故がありました。

この2つのうち、小説の小坂が、8ミリのナイロンザイルで墜死していますことから、前者の遇難記録がそのモデルとなつたのでありましょう。そして実際に起きたザイルの切断事故によつて、当時山岳界に大変なセンセーションを捲き起こしました。

そこで問題とすべきことは、ナイロンザイルは切れない(8ミリのナイロンザイルは、マニラ麻11ミリの強度に匹敵する)といわれたことではありますが、どのような実験結果から、切れないという結論を出したのでありましょうか。勿論各種各様の場合を想定してのテストが、専門家によつて行なわれてあるのでしょうか、先にもふれましたように同一の状態については、一度ないしは数度程度のテストしかしてないような印象を受けます。

ザイル切断は、それが直接人命に繋がる問題だけに、その実験はより慎重に進められた筈であろうと思いますが、都内の大きな運動具店などに行きましても、そのザイルは絶対大丈夫ですよというだけで、切れないという限界またはその実験内容については、全然解つていないのが実情であります、ことザイルばかりではありませんハーケンにしても、カラビナにしても、同様のことがいえます。

これらの実験に対しても、統計的裏付けがあつたならそしてその実験内容が、使用者に容易に入手できる方法がとられたなら、事故の発生後になつて改めて切れるか切れないかなどと問題にする必要はなかつたのではないのでしょうか。なぜなら事故は未然に防止できた筈であり前途ある若きアルピニストは今なお健在であつた筈であります。

そしてまた、あらゆる場合の抗張力試験で切れないという結論が出ていたのなら、そのあらゆる場合の切断テストを、事故後に改めて行う必要はなからうと思ひます。事故発生後に行うザイル切断テストはただ一つ、実験担当八代教之助博士の当初に言つた言葉のとおり、切断した状態におけるテスト以外はないだろうと思ひます。そして前穂東壁Aフエース上部のザイルを掛けた岩場をそつくり実験場に廻つて、切断した8ミリザイルに小坂の体重と同じ重量の落下物を結び、何百回も何千回

も落下テストをすることが必要ではなかつたでしょうか。そして、そのような状態のもとでは、8ミリナイロンザイルが切断するという確率はいくらであつてその切断するという事象が、たまたま小坂の初めて使用したナイロンザイルに偶然にも発生したものだと思ひます。

このように数多くの試行の中から、8ミリナイロンザイルのもつ危険性について統計的裏付けをなしたならば無二の岳友である小坂をうしなつた魚津の、失意に沈んだ心を、幾分でも柔かく包んでやれたであろうと私は思ひます。同一状態に対する切断テストを、一度ないし数度だけの結果から、ナイロンザイルは切れないと断定し切れたのは他の理由からである、他の理由とは、若くてしずかな美しさを湛えた八代夫人への、小坂と魚津の葛藤に原因があつたのであろうなどと、極めて人間的推量をもつて、魚津への疑惑を深め、失意の底にある彼を、更に底なしの泥沼へと追い込んでいつたことに、人間としての救いようのない哀しさを感じずるものであります。魚津はやがて穂高の裏側の滝谷の大断壁を越えることによつて、八代美那子の幻影を払いのけようとしてました。そしてまた彼の心のどこかでは、ザイルは切れる筈がないとさわぐ市中の蛙どもに、Aフエース上部から小坂を消えさせたザイル切断の現実が、そして冬の3千米級山岳の、吹雪に雄叫けぶ凄絶な様相が解つてたまるかと考え、あるときは、無責任な放言を、まことしやかに並べたてる連中の住むこの汚れた市中から、彼のきづついた心を、やさしく抱擁してくれる山懐に、深く逃避したいと、幾度か考えたことでありましよう。

酒沢岳の西尾根と、第五尾根との間のD沢に踏み込み酒沢岳の西尾根からの落石音をききながら、危険と知りつつ登行を続け、あえて若い生涯を永遠に閉じてしまいました。私は思ひます。ザイルは切れてはならないでしよう。しかし切れないという絶対の保証はあり得ないと思ひます。何千回かの抗張力テストから、切断する確率を示し、切断するという偶然的な事象が、不幸にも小坂の上に起つたのであつたことを、魚津への餞けとして送りたかつたと思ひます。(一本杉)

◆……………日本統計年鑑のむかしばなし……………◆

日本政表としての第1巻は、明治5年4月「辛未政表」と題して太政官政表課より刊行された。

この「辛未政表」は菊版・和紙使用・木版刷58葉のもので、表紙見返しには「史局編纂」本文の初頭には、「大主記杉亨二編纂」と記入されており、現在総理府統計局に貴重文献として保存されている。

◆……………編 集 部……………◆

統計図表入選者の紹介 (下)

統計図表全国コンクール第2部 (本県の第3部 中学校の部)

課題…あなたがたの住んでいる市町村または学校生活の実情を示す統計図表

入選四席 「古河市からの東京通勤者」

市立古河第2中学校 2年 石川 進 君
染谷 幸一 君

統計図表「古河市からの東京通勤者」を書いて

石川 進・染谷 幸一

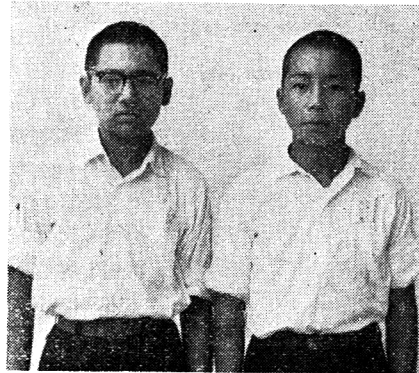
古河市は茨城県の最西端にあつて、西の渡良瀬川、南の利根川に囲まれた関東平野の中央部にあり、東京都には南へ64キロ、電車で約1時間の位置にある。人口は4万3千人将来は東京の衛星都市として大きく発展するだろうということも聞いているが現在のところ毎日多くの人が東京通勤で働いている。

朝や夕方に古河駅を乗降する多くの人のあわただしい動きを何回かみて、一体どれ位の人が通勤しているのだろうかと調べて見ることにした。それを表わしたのがこの夏休みに書きあげた統計図表である。

まず古河駅について定期券を利用している通勤者がどれ位いるのかについて駅員さんをお願いして大きな帳簿を見せてもらい、昭和30年から今年までの推移を、1日がかかりで調べあげた。年々通勤者が多くなっていることが目立つた。これだけではまだ多くなっていることだけで、古河市の働いている人(就業人口)に対してどれくらいの割合か



石川 君



染谷 君

についても調べることにした。古河市役所をたずねて調べてみると、何と就業人口17,500人のうち、実に24%が東京通勤者であることがわかった。何と大きい数字だろう。ただ多いということは聞いていたがはつきりと数字が表されてみるとあらためておどろいた。ためしに県内各都市と比較してみると、やはり古河市からの東京通勤者が県下一であることが分つた。現在のところ古河市の一つの特徴であると思う。先生も「古河市は東京のミッド・タウンといえるね。」と申されていた。

これらの資料を利用して図表化するのにどのように構成するかで一番苦労した。小さい紙にいろいろの組合せ、構成を書いてみた。まずわかりやすいこと、そして安定していること、美しくみえることを考えて表題や説明の言葉とあわせて何回かの検討のすえ出来上つたのである。カットを加えて古河市の東京に対しての位置を表わしたのもよかつたと思う。

色彩についてもいろいろと考えてみた。色彩の点だけで3枚もの書き直しをしてやつとでき上がったのである。書き直しすることに自分でもよくなつていくのがうれしく感じられた。あの暑かつた夏休みに約10日間、何人かの人と一しよに図表を完成したときはホツとしたと同時に大へんうれしかつた。図表を完成するまで、ただ書き上げたばかりではなくいろいろのことを教えられ考えさせられる統計図表のもつ使命が大きいものであることを思つた。

【評】 テーマ・構図・色彩ともに欠点のない統計図表であります。落ち着いた色彩と洗練された技法とによつて、東京近郊の都市の特長を、よく画きだした統計図表です。全国展入選四席の風格充分であります。

統計のあり方についての反省

能率ノ3原則

コンナ事務機ノ使イ
オチワ決シテ能率
的トワイエモン。

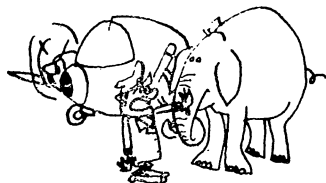


ムツ⁰⁰



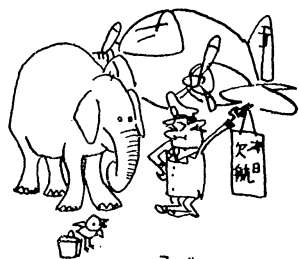
目的別手段がオチイ

ムリ



目的ヨリ手段ヲナイシ

ムラ



アンバランス

本誌の8月号で「統計の機構とその自主性」という標題で私見を申し述べました。つまり統計機構を集中化して県の行う統計調査はすべて統計課が所管し、一元化して行うべきであるか否か、また調査機構が各部局に分散化されてある以上、その統計調整をどのようにすべきか、或いは統計実施機関からその自主性を失なわせた場合、統計の真実性にどのような影響があるかなどについてであります。今回はもう少し問題を掘り下げて反省をしてみたいと思います。

先づ統計機構の再認識からであります。統計という文字、あるいは言葉が、ラジオやテレビや新聞など凡ゆる広報機関を通じて毎日のように飛び込んでくる昨今、いまさら統計とは何か、統計はどのように利用されるか、統計は何故重要であるかなど、ここに取り上げる必要はない筈であります。まことに「統計とは」などと陳腐めいたことを申し述べる考えは毛頭ないのであります。私どもを支配する官庁統計機構を眺め直してみますといささかカビの生えたような論旨を、再び振りかざしてみたいと思うのは果して私一人でしょうか。

先日行政管理庁に出張した際大手町の産経ホール別館に私の友人の勤めている会社があります。そこへ寄つて参りましたが、その会社にはIBM課という課がありました。一般事務機械や統計機械を取扱っている会社ではないのですから、ましてIBM社の取次ぎ店でもありませんからIBM課とはおかしいと思いますが、つまりこの課ではIBM社製の統計機械を入れて営業内容を統計的に処理し、営業の指針に供していると同時に、集計事務を機械化して利潤追求のための合理化を図つているのであります。民間会社では、より低いコストでより高い収入を追うのは当然で、幾分でも利潤が挙がるということになれば、直ちにそのような態勢に会社の機構を変えて行くのであります。単に市場を維持するに止まらず市場拡大には常に積極的であり、利潤追求のために採られるすべての積極性は睨目に値するものがあります。そこに働く一介のビジネスマンに至るまでの凄じい潮気に驚くと同時に私どもオフィスマンの物事を対処する考えのうつろなまでの悠長さを改めて感じないわけにはいきませんでした。これには給与体系の問題も介在するとは思いますがそれにしても、激しい市場競争に狂奔する実態の一面をのぞいて、私どもは果して現況に満足してよいのだろうかと考えました。「鈍くなつた官庁統計発展の歩み」という論文が、全統連の第10回応募作品に入選したのを讀んだことがあります。そのなかで「統計は行政資料とするなり、諸分析をするなり、ある目的があつて実施されるものであるからどんなに正確な統計ができ上つても、そのとりまとめに時間がかかつて結果がおくれ、十分に利用することができなかつたのでは統計としての利用価値は半減してしまう。統計を利用する人たちは三年後とか、二年後とか悠長なことはいわず、常に新しい資料を求めた必要としているので、もつと結果を早く公表する必要がある。」といつております。私はこの論旨がまことにもつともであり、つねつね痛感しておるもの一人であります。結果の公表を早くすることといひますのは内には私どもの行政事務をスピーデイに処するため如何にすべきかという深い反省が必要でありましょう。と共に外的要件にも意欲的な改革を必要としているのではないのでしょうか。ここで外的なものとは、即ち統計調査

の企画・実査・公表が正確迅速に行なわれるよう従来からの調査機構を、統計利用者側の需要度にあわせ得るよう改めていくことであります。県の統計としては、県政に現在最も必要とする資料は何であるか、その資料を整備するには、どのような統計調査を行うべきであるかという県統計調査の基本的問題の検討が必要であります。また政府が実施する統計調査も、県が単に委託調査として政府への報告書を提出するにとどまらず、その調査結果が県政に利用し易いような結果表を作成して利用者へ供し、政府の調査が抽出調査であれば、すべて県が利用し得る程度までの調査客体を抽出すべきであります。更に技術的問題であります、各種統計調査に用いられる同一の用語は、その定義を同義語に統一すべきであると思えます。例えば、1960年センサスでは、農家の定義が耕種では東日本は1反歩以上とし、西日本では5畝歩以上としております。従つて7畝耕作の場合、岡山県では農家として調査され、本県では調査客体から除外され、わが国の農家数という双方の農家の合計をさしています。或いは本県内でも、同じ農家という用語は、センサスでは1反歩以上であり、農業基本調査では5畝以上となつており、同一調査でも同一用語に対して地域によつて定義が異なり、また同一地域における同一用語でも調査が別のために異つた定義となつております。利用者側では主として用語が同じであれば同様に取扱つて利用する場合が多く、用語の定義にまで遡つて区分利用するものは極めてすくないと思われまふ。日本標準産業分類でも、この場合農業の分類を示しても、農家の標準的考えは示してありません、調査の目的から一律に規定することは、種々と問題があるでしょうが利用し易い統計という面からは、ぜひ中央機関において研究して戴きたい問

題であります。

さらに結果の迅速な公表ということになりますが、実査という作業期間が、長期にわたるということは、通常考えられませんが、集計が長期にわたることはしばしばであります。「結果の解るのはいつか」「概数でもよいから解らないか」などの問い合わせが、集計中に殺到して参ります。しかし集計作業のテンポを現在以上に早めることは、現況では不可能な話であります。

しかし今日では、各種統計機械の革新的進歩の前に、飛躍的發展がなされつつあります。集計機構の機械化が今日の統計のすべての問題を解決するとは考えませんが問題解決の上に大きいウエイトを占めているには違いありません。翻つて私どもの計算機の主力をなすものは、依然としてソロバンであります。ソロバンが極めて有用なものであり、私どもの日常生活からは欠かせないものであることは充分認めるものであります、然し県単独の調査でも、実査終了後数カ月の期間と、尨大な人的労力を投入した手集計に今後も依存してゆかねばならないとすれば、果して妥当なものであるかどうか考えないわけには行きません。

今日では集計機構を機械化することには、巨額の予算を必要としなくなりました。月間12~3万円の賃借料を支払うことによつてPCS方式の集計高速化が既に可能となつております。

従つて本県においても集計機構を機械化し、或いは計算センターの設置に踏み切る時機に来ていると考えるものであります。

鈍くなつた官庁統計発展のあゆみが、再びスピーディな進展を示すか否かは、それに対処する考え方如何であり、それはまさに現在にあります。(一本杉 清)

4次元の世界

わたくしたちが現在住んでいる世界は、たて・よこ・たかさのある3次元の世界であることに間違いありません。しかし数学で創造できる4次元や高次元の世界は具体的にはどんな世界でしょうか？

わたくしたちは数的なものを表示するのに何の疑問もたずに十進法なる方法をもちいています。即ち0, 1, 2……9の10個の数字を組みあわせてすべての数量的なものの処理をしております。

しかし電子計算機の世界では二進法をもちいています。電子が流れている状態を^{プラス}「1」、停止の状態を^{マイナス}「0」としての二進法で百万分の1秒くらいの短い時間を単位として数値の読み込み計算を行つております。

即ち3次元にすむ私たちから十進法の数値をとり入れ、二進法によつて計算した結果を、再び十進法にかえて私たちに戻して参ります。従つて計算については電子計算機は、3次元の私たちより一歩進んだものといひましよう。

来る新しい年こそ、より高次元の希望あふれる年でありますよう、そして去りゆく1961年に、心から感謝の祈りを捧げたいと思ひます。

— 編集部 —